

## 第四章 近松をめぐる人々

### 一、一条禅閣惠観（一六〇五―一六七二）

一条惠観は後陽成天皇の第九子で、後水尾天皇の弟にあたります。一条家を継いで、一条昭良とも言い、禅門に入った身で関白を勤めたので禅閣とも称します。杉森家系譜には近松について「一条禅閣惠観に仕える」と書いてあります。

惠観の山荘止観亭に現存する杉の戸板には人形芝居の図が描かれていることから、惠観は人形芝居に関心があつたと思われれます。その惠観に仕えたことで、近松は人形浄瑠璃に興味を持ったに違いありません。

### 二、正親町公通（一六五二―一七三三）

正親町公通は、日本の古典や有職故実（昔のしきたり）に通じ、優れた絵をかき、作品を多く残しています。とくに狂歌を好み、その作風は日本や中国の古典をもとにして、掛詞（一語に、異なる二つの意味を兼ねるように使われた言葉）を多用し、知的で上品なものが多いといわれています。また、浄瑠璃太夫の宇治加賀掾のために浄瑠璃を作っていました。近松はその使いをしているうちに、浄瑠璃作者になったという逸話も残っています。

### 三、宇治加賀掾 浄瑠璃太夫（一六三五～一七一）

宇治加賀掾は、紀伊国（現在の和歌山県）の紙商の子で、十六歳のときに謡曲や狂言・舞曲などを学びました。伊勢（現在の三重県）で人形芝居を行い、浄瑠璃を語っていましたが、延宝三年（一六七五）京都四条河原で芝居小屋「宇治座」をひらき、宇治嘉太夫を称するようになりました。また、同五年（一六七七）には

朝廷から掾号じょうごうを賜り宇治加賀掾となりました。

宇治加賀掾の芸風げいふうは、織細せんさいで上品であったといわれ、浄瑠璃の語りに音楽性を取り入れました。また、人形やその衣装にも工夫をこらすなど、常に新しさを求める芝居を行い、成功をおさめました。近松と協力してすぐれた浄瑠璃作品を生み出し、歌舞伎役者の坂田藤十郎とも親しく交わるなど、演劇の世界に果たした功績は大きいといわれています。

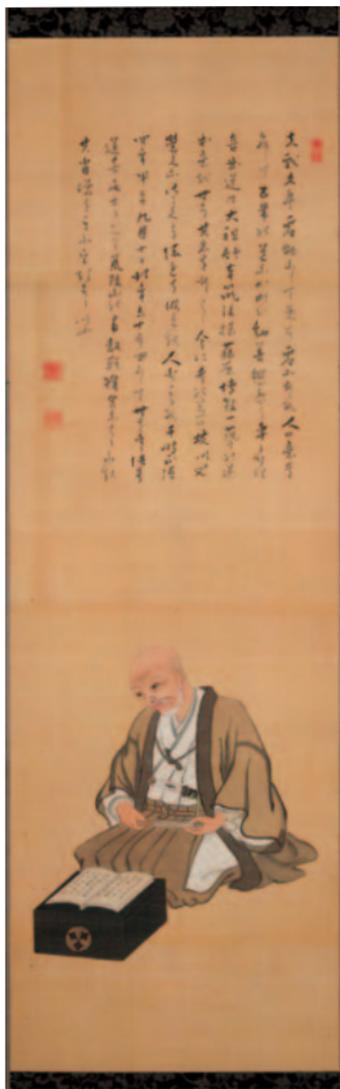
#### 四、竹本義太夫たけもとぎだゆう 浄瑠璃太夫じょうるりたゆう（一六五一—一七二四）

竹本義太夫は摂津国せつつのくに（現在の大阪府）の農家の生まれで、早くから浄瑠璃を好み、大音で、はっきりした語り方であるという恵まれた素質を持っていました。上方浄瑠璃の第一人者井上播磨掾いのうえはりまのじようの芸風をしたい、家業を捨てて浄瑠璃界に入ります。初舞台は延宝四年えんぼう（一六七六）ごろで、同五年（一六七七）には京都の宇治

座に出演して宇治加賀掾のワキ（主人役の相手）を語っています。同八年（一六八〇）ごろから竹本義太夫と名乗るようになりました。

貞享元年（一六八四）に竹本座を創立し、近松の旧作『世継曾我』を語って大

評判になり、義太夫の人気は不動のものとなります。この後「義太夫節」は浄瑠璃の主流となりました。そして、元禄十一年（一六九八）正月以前に朝廷から掾号を賜り、竹本筑後掾と称しました。



竹本筑後掾肖像  
(大阪市立博物館所蔵)

五、辰松八郎兵衛 大坂竹本座の人形遣い（生年不詳〜一七三四）

辰松八郎兵衛は、女形人形遣いの第一人者と呼ばれる人物です。近松との関連では『曾根崎心中』の「大坂三十三所観音廻り道行」で操った手妻人形（からくり人形）で有名です。後に江戸へ出て、「辰松座」を興し、操り人形をひろめ人気を得ました。

六、竹田出雲 大坂竹本座の座本 浄瑠璃作者（一六九一〜一七五六）

竹田出雲は、大坂道頓堀のからくり芝居の興行師であった初代竹田近江の子とも、弟ともされています。宝永二年（二七〇五）竹本座の新座本となりました。近松の才能を十分に引き出し『用明天王職人鑑』を上演します。これから演技者・竹本義太夫、座付作者・近松、経営者・竹田出雲という三人体制が確立されました。



【役者万年曆】(京之卷)にみえる坂田藤十郎  
(早稲田大学演劇博物館所蔵)

た。以来、竹田出雲は舞台と人形の改良に力を尽くし、後には近松の添削を受けたりするなど、浄瑠璃作者としても竹本座を支えました。竹田出雲によって近松は竹本義太夫と並ぶ地位を得て作者活動に専念できました。

## 七、坂田藤十郎 歌舞伎役者

(一六四七～一七〇九)

坂田藤十郎は、祖先は越後国(現在の新潟県)の出身で、父は京都で座本を勤めた坂田市左衛門といわれています。延宝四年(一六七六)の役者評判記では都万太夫座四天王の一人と呼ばれ、京都中の期待通り、人気を得ていきます。

元禄十二年（一六九九）の近松作品『傾城けいせい 仏ほとけの原はら』での主役が好評で、京都の立役の第一人者となります。藤十郎は近松の意見を尊重しながら芝居をつくり、近松もまた藤十郎のために三十近い歌舞伎作品を書きました。藤十郎は円熟した芸を見せましたが、元禄十四年（二七〇一）に座本を退いた後、大和山やまとやま甚じん左衛門ざえもんにその芸を伝え、宝永六年（一七〇九）に亡くなりました。

